

那覇教区 要理教育書

— 沖縄の風景に聞く、教会のことば —

中巻

第11課～第20課

本書について

本書は、沖縄の風景・歴史・習俗を手がかりに、聖書と教会の教えを読み解く全30課からなる要理教育書です。那覇教区における求道者養成および信徒リーダー（要理教師候補）養成での使用を目的として編まれました。

各課は「一、沖縄の風景から」「二、教会は何を教えるか」「三、日々の生活へ」「四、結びの黙想」という一貫した構成をとり、続けて「◆要理のまとめ」（学びの要点・カテキズム参照・用語解説）と「◆分かち合いの問い」（求道者向け／信徒リーダー向け）を収めています。

「教会は何を教えるか」の章句は、聖書と『カトリック教会のカテキズム』（CCC）を中心とした教会の伝統的な教えを、沖縄の具体的な風景から立ち上がる問いに応答する形で展開しています。

指導者は、参加者の状況に応じて分かち合いの問いを選択し、あるいは両方を織り交ぜて用いることができます。カテキズム参照は、実際の講座で使用する前に一度照合されることをお勧めします。

目次

- 第11課 亀甲墓 「死者は共同体から去るのか」
- 第12課 清明祭 「記憶することは愛することなのか」
- 第13課 門中墓 「血縁はどこまで人を縛るのか」
- 第14課 ウンケー 「帰ってくるとは何か」
- 第15課 ガンガラーの谷 「人間はどこから来たのか」
- 第16課 浜比嘉島 「神話は嘘なのか」
- 第17課 シーサー 「人はなぜ境界を守るのか」
- 第18課 第一牧志公設市場 「値段は価値を表すのか」
- 第19課 泡盛の模合 「喜びはどこから罪になるのか」
- 第20課 旧盆のエイサー 「身体は祈ることができるのか」

第11課 亀甲墓

テーマ:「死者は共同体から去るのか」

一、沖縄の風景から

路地を曲がると、突然、墓が現れます。沖縄を初めて歩く人が驚くのは、たいていこれです。丘の斜面に、家のように大きな墓が並んでいる。屋根の曲線が亀の甲羅に似ていることから、亀甲墓と呼ばれます。古いものはサンゴ石灰岩を積み、新しいものはコンクリートで造られ、どちらにも、墓庭と呼ばれる広い前庭があります。

墓は、集落を見下ろす場所にあります。畑の隣に、住宅の裏手に、通学路の途中に。生活の風景の中に、死者の家が普通に混ざっているのです。本土の霊園のように、生活から切り離された区画に整列してはいません。

亀甲墓の形は、母の胎を模していると言われます。人は母の胎から生まれ、死ぬと母の胎へ帰っていく。墓の入口は、産道なのだと。夕方、部活帰りの中学生が、墓の前の坂道を自転車で下っていきます。誰も、怖がっていません。死者の家々は、今日も静かに、生者の暮らしを眺めています。

近代の都市は、死を遠ざけてきました。人は病院で亡くなり、葬儀場で送られ、郊外の霊園に納められます。死者の場所は、生活圏の外へ外へと押し出されてきました。

沖縄の墓は、その逆を向いています。死者は、集落のすぐ隣に住み続けます。家族は墓庭に集い、弁当を広げ、死者と一緒に昼を過ごします。

どちらが正しい、という話ではないのでしょうか。ただ、問いが立ち上がります。死者は、共同体から去るのでしょうか。去らせるべきなのでしょうか。それとも、とどまってもらえるのでしょうか。そもそも、決めるのは誰なのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

教会は、信条の中で、聖徒の交わりを告白します。本書の第2課でも触れましたが、ここではもう一步、内側に入ってみます。

カトリックの伝統は、教会をひとつの共同体として考えながら、そこに三つの状態を見てきました。地上を旅する教会。清めのうちにある教会。そして、栄光のうちにある教会。古い言い方では、戦う教会、苦しむ教会、勝利の教会、と呼ばれました。言い回しは時代がかっていますが、骨格は明快です。死者は、教会の名簿から消えないのです。洗礼を受けた者は、死んでも、同じひとつの共同体の一員であり続けます。

だからこそ教会は、死者のために祈ります。ミサの奉献文には、亡くなった人々を思い起こす祈りが、必ず組み込まれています。十一月は死者の月と呼ばれ、諸死者の日には、司祭が墓地に出向いて墓を祝別します。ヨーロッパの古い町では、墓地は教会堂のすぐ隣、チャーチヤードにありました。日曜のミサに行く人は、必ず死者たちの間を通して聖堂に入ったのです。死者を生活圏の外に隔離したのは、教会の伝統ではなく、近代のほうでした。

亀甲墓の、母の胎という思想にも、遠く響き合うものがあります。古代の教会は、殉教者の命日を、ディエス・ナタリス、すなわち誕生日と呼びました。死は終わりではなく、いのちへの誕生である、と。死を誕生のかたちで語る想像力を、海を隔てたふたつの伝統が、それぞれに育ててきたことになります。

ただし、ひとつだけ、区別しておきたいことがあります。死者がとどまる、と信じることと、死者に縛られることとは、同じではありません。死者との交わりは、生者を支えるためのものであって、生者を裁いたり、脅したりするためのものではないはずです。教会が死者のために祈るとき、その祈りは恐れからではなく、変わらぬ愛から捧げられます。死者は去らない。けれども死者は、生者を縛るためにとどまるのでもない。この線引きの難しさについては、続く回で、もう少し考えることになります。

三、日々の生活へ

あなたの暮らしの中に、死者の居場所はあるでしょうか。

亡くなった人の写真が、飾られているでしょうか。それとも、見るのがつらくて、しまい込んだままでしょうか。命日に、何かしているでしょうか。食卓で、亡くなった人の話が出るでしょうか。子どもたちは、会ったことのない祖父母について、何かを知っているでしょうか。

悲しみが深いとき、人は死者の痕跡を遠ざけることがあります。それは弱さではなく、心を守る自然な働きです。急ぐ必要はありません。けれども、いつか、少しずつでいい、死者に居場所を返してあげられたら、と思うのです。写真一枚でも、年に一度の墓参りでも、ふとした思い出話でもいい。

死者を暮らしから閉め出した共同体は、実は、生者にも冷たくなっていきます。役に立たなくなった人、いなくなった人を、いないことにする習慣が、そこで育つからです。死者の席がある食卓は、たぶん、弱った生者にも席のある食卓です。

四、結びの黙想

あなたの共同体の名簿を、思い浮かべてみます。

そこに、死者は載っているでしょうか。

今夜、亡くなったあの人のために、短くひとこと、祈ってみます。

祈りは、去った人への手紙ではなく、隣にいる人への声かけかもしれません。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 亀甲墓は死者を集落のすぐ隣に置き続けるのに対し、近代都市は死者の場所を生活圏の外へ押し出してきた。
- ・ カトリックの伝統は教会を「地上を旅する教会・清めのうちにある教会・栄光のうちにある教会」の三つの状態として捉える。
- ・ 死者を生活圏の外に隔離したのは教会の伝統ではなく近代の方であり、かつては墓地は教会堂のすぐ隣にあった。
- ・ 死者がとどまると信じることと、死者に縛られることは同じではない——死者との交わりは生者を支えるためのものである。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 954-959 教会の三つの状態——地上の教会、煉獄の教会、天上の教会の一致。

CCC 1032 死者のためのミサと祈りの伝統。

CCC 1681-1690 キリスト教的な死の意味——死は誕生への通過である。

用語解説

戦う教会・苦しむ教会・勝利の教会 地上・煉獄・天国にある教会員をそれぞれ表す古い呼称。

ディエス・ナタリス ラテン語で「誕生日」。古代教会が殉教者の命日を、死ではなく誕生として呼んだ言葉。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 亡くなった人の写真は、あなたの暮らしのどこに（あるいは、しまい込まれて）ありますか。
- ・ 今夜、亡くなったあの人のために、短く一言祈ってみましょう。

【信徒リーダー向け（要理教師候補）】

- ・ 「死者を暮らしから閉め出した共同体は、実は生者にも冷たくなっていく」という指摘を、高齢者・独居者への司牧にどう結びつけますか。
- ・ 死者との交わりを「生者を支えるため」と限定する区別は、祖先崇拝の実践を持つ信徒への識別指導にどう役立ちますか。

第12課 清明祭

テーマ:「記憶することは愛することなのか」

一、沖縄の風景から

四月、旧暦の三月。沖縄の墓庭が、一年でいちばん賑やかになる季節です。清明祭。シーミーと呼ばれます。

門中の家族たちが、重箱を提げて集まってきます。ウサンミと呼ばれる供え物。三枚肉、かまぼこ、天ぷら、昆布、餅。まず墓に供え、線香を上げ、ウチカビと呼ばれるあの世のお金を焼きます。それが済むと、重箱は下げられて、そのまま宴会が始まるのです。墓庭にシートを広げ、ビールが開き、子どもたちが走り回ります。

初めて見る人は、戸惑うかもしれません。墓の前で、こんなに笑っていいのか、と。けれども、しばらく眺めっていると、分かってきます。これは、死者と一緒に食べる昼食なのです。近況が報告され、去年の受験の結果が告げられ、赤ん坊が墓に紹介されます。おじいちゃん、ひ孫ですよ。

風が吹いて、線香の煙が流れます。死者は、今日も家族の輪の中にいます。

清明祭は、記憶の行事です。死者を忘れないこと。年に一度、必ず顔を見せに行くこと。

記憶することは、愛することだ、と私たちは感じています。だからこそ、逆が怖いのです。忘れることは、裏切りなのでしょうか。命日をすっかり忘れてしまった朝の、あの罪悪感。認知症が進んで、連れ合いの顔が分からなくなった人は、愛することをやめたのでしょうか。

記憶と忘却の境界線の上で、問いが立ちます。記憶することは、本当に、そのまま愛することなのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

聖書の神は、記憶する神です。神は契約を思い起こし、民の苦しみを思い起こし、預言者は歌います。母が乳飲み子を忘れることがあろうか、たとえ母が忘れても、わたしはあなたを忘れない、と。イザヤ書の、最も柔らかい一節のひとつです。神に記憶されていること。それが、聖書の民の存在の土台でした。

ところが、同じ聖書に、驚くべき言葉があります。神が、忘れる、と言うのです。わたしは彼らの罪をもう思い出さない。エレミヤ書の新しい契約の約束であり、イザヤ書にも同じ響きの句があります。神の忘却は、記憶力の欠損ではありません。赦しです。もう蒸し返さない、もうそれであなたを測らない、という愛のかたちとしての忘却が、聖書には確かに書かれているのです。

ここから、記憶と愛の関係を、もう一度考え直すことができます。記憶は、いつも愛とは限りません。恨みもまた、執拗な記憶です。復讐は、決して忘れない、という決意の別名です。記憶することがそのまま愛なら、恨み続ける人こそ最もよく愛する人になってしまいますが、そうではないでしょう。記憶は器であって、中身は問われるのです。

教会は、二千年紀の変わり目に、記憶の清めという言葉を使ったことがあります。過去の過ちの記憶を消すのではなく、記憶から毒を抜き、痛みの記憶を和解の記憶へと造り変えていく祈り。赦しとは、記憶の消去ではなく、記憶の癒やしなのです。

そしてもうひとつ。人間の記憶は、必ず薄れます。清明祭に集う人々も、三代さかのぼれば、顔も声も知らない先祖に手を合わせています。記憶が尽きたところを、儀礼が引き継いでいるのです。それは空虚な形式ではなく、人間の記憶の有限さへの、正直な対処だと思います。私たちは忘れる生き物です。だからこそ、死者を最終的に委ねる先は、人間の記憶ではなく、神の記憶なのです。永遠の安息を、と教会が祈るとき、それは、神に永遠に記憶されていますように、という祈りでもあります。忘れることもまた、慈しみでありうる。人間が安心して忘れられるのは、忘れない方がおられる、と信じるからです。

三、日々の生活へ

故人の遺品を、いつ手放すか。多くの人が悩む問いです。手放すことは忘れることだ、と感じて、何年もクローゼットが開けられない。けれども、物を手放すことと、人を忘れることとは、別のことです。神の記憶に委ねる、という信仰は、ここで实际的な力を持ちます。私が全部を抱えていなくてもいい、と思えるからです。

逆の悩みもあります。忘れたいののに、忘れられない記憶。受けた傷、ひどい言葉、あの日の光景。忘れようと努力するほど、記憶は固くなります。そういう記憶は、消そうとするより、毒が抜けるように祈るほうがいい。出来事がなかったことになる日は来なくても、その記憶があなたを支配しない日は、来るかもしれません。

そして、覚えられなくなっていく人のそばにいる人へ。名前を忘れられても、顔を忘れられても、あなたの世話をする手と、隣に座る時間は、記憶とは別の場所で、愛であり続けています。記憶が愛のすべてなら、それは絶望的な事態でしょう。けれども、愛は記憶より深いところを流れているのです。

四、結びの黙想

忘れてしまったことを、今夜は責めないでみます。

あの人の命日も、顔の細部も、声も、いつか薄れていきます。

薄れていくものを、忘れない方の手に、そっと預けてみます。

母が忘れても、わたしは忘れない、という声とともに。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 聖書の神は「記憶する神」であると同時に、赦しにおいては「もはや思い出さない」神でもある(エレミヤ31章、イザヤ書)。
- ・ 記憶はそのまま愛とは限らない——恨みもまた執拗な記憶であり、記憶は器であって中身が問われる。
- ・ 教会は「記憶の清め」を語り、赦しとは記憶の消去ではなく、記憶の癒やしであるとする。
- ・ 死者を最終的に委ねる先は人間の限りある記憶ではなく、神の記憶である。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 2840 赦し——「私たちの罪をお赦しください」の祈りが求める心の態度。

CCC 1465 ゆるしの秘跡は記憶を癒やし、和解をもたらす。

エレミヤ31:34 「わたしは彼らの罪をもう思い出さない」——新しい契約の約束。

用語解説

記憶の清め 過去の過ちの記憶を消すのではなく、痛みの記憶を和解の記憶へと造り変えていく祈り（教会が2000年の大聖年に用いた表現）。

永遠の安息を 死者のために唱えられる伝統的な祈りの句。神の記憶に委ねる祈りでもある。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 忘れてしまったことを、今夜は責めないでみましょう。
- ・ 薄れていくものを、忘れない方の手にそっと預けてみましょう。

【信徒リーダー向け（要理教師候補）】

- ・ 「忘れることもまた慈しみでありうる」という洞察を、遺品整理や喪の作業に悩む信徒への同伴にどう活かせますか。
- ・ 「記憶の清め」という概念を、地域の歴史的和解（戦争、対立の記憶）を扱う教会の役割としてどう展開できますか。

第13課 門中墓

テーマ:「血縁はどこまで人を縛るのか」

一、沖縄の風景から

糸満の郊外に、ひときわ大きな墓があります。個人の墓ではありません。門中墓。父系の血筋でつながる一族、門中の墓です。大きなものになると、数百人分の遺骨が納められているといいます。

墓には、規則があります。この墓に入れるのは、誰か。門中の男とその妻、そして未婚の娘。嫁いだ娘は、婚家の墓に入ります。かつては、血筋の外の子や、家を離れた者について、厳しい定めを持つ門中もあったと聞きます。墓は一族の家であり、家である以上、敷居があるのです。

そして、位牌。トートーメーと呼ばれる位牌の継承は、今日でも、沖縄の家族の切実な問題です。原則として長男が継ぐ。男の子のいない家はどうするのか。継ぐことを望まない息子は。継ぎたいのに許されない娘は。新聞の人生相談には、いまトートーメーをめぐる悩みが、繰り返し寄せられます。

血は、人を支えます。あなたはひとりではない、と。そして血は、同じ声で、人を縛ります。あなたはひとりではないのだから、と。

血縁は、選べません。生まれ落ちた瞬間に、私たちはすでに、誰かの子であり、どこかの家の者です。その与えられたつながりが、人生のいちばん深い支えになることもあれば、いちばん重い鎖になることもあります。

血縁は、どこまで人を縛るのでしょうか。そして、どこからは、縛ってはならないのでしょうか。血の内と外を分ける線は、誰が引いてよいものなのでしょう。

二、教会は何を教えるか

福音書には、家族について、ぎょっとするような場面があります。イエスが群衆に教えていると、母と兄弟たちが訪ねてきた、と知らされます。イエスは答えるのです。わたしの母、わたしの兄弟とは誰か。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ、と。実の母マリアが外で待っているときに、です。ルカ福音書には、さらに激しい言い方さえ残っています。

初代教会の人々は、血のつながらない者同士を、兄弟、姉妹と呼び合いました。奴隷と主人が、ユダヤ人と異邦人が、同じ食卓で家族の言葉を使ったのです。洗礼は、第二の誕生と呼ばれます。そして第二の誕生は、第二の家族を作りました。洗礼式に代父母という役割があるのは、その名残です。血によらない親。教会は、血縁とは別の原理で結ばれる家族が可能だ、と、体を張って主張してきた共同体なのです。修道会という生き方は、その最も徹底した実験だと言えるでしょう。

それなら教会は、血縁を否定したのでしょうか。ここが、注意のいるところです。教会は、父母を敬え、という掟を、一度も手放していません。イエス自身、十字架の上で、最後の力を使って何をしたか。母マリアを、愛する弟子に託したのです。婦人よ、御覧なさい、あなたの子です。血縁を踏み越える言葉を語った同じ人が、死の間際に、母の行く末を案じました。イエスがしたのは、家族の解体ではなく、家族の再定義だったのだと思います。血は、家族の一つの形であって、唯一の形ではない、と。

この視点は、沖縄の教会にとって、絵空事ではありませんでした。位牌の継承や祖先への務めをどう考えるかは、この地の信徒が現実に関わり続けてきた問いです。そしてカトリック教会は、祖先への敬意を頭ごなしに偶像礼拝と断じる道を、選びませんでした。先祖を大切にすることと、神への信仰とは、識別を要

するけれども、敵同士ではない、と。血縁の重みを知る土地で、教会は、血縁を裁くためではなく、血縁に押しつぶされそうな人に、もうひとつの家族があると告げるために、立っているのだと思います。

洗礼の家族は、血の家族からの逃亡先ではありません。血がすべてではない、という知らせです。その知らせひとつで、呼吸ができるようになる人が、確かにいるのです。

三、日々の生活へ

家業を継ぐか、継がないか。親の期待に応えるか、自分の道を行くか。介護は、長男の嫁の務めなのか。家族なんだから、という言葉が、頼もしく響くときと、逃げ場を塞ぐ壁になるときがあります。

血縁に恵まれた人は、それが実力ではなく授かり物であることを、ときどき思い出したいものです。そして血縁に苦しむ人は、覚えていてほしいのです。あなたの値打ちを最終的に決めるのは、家系図ではありません。血の家族と縁を結び直すにせよ、距離を取るにせよ、あなたには、血によらないつながりを育てる自由が残されています。長年の友人。同じ痛みを知る仲間。信仰の共同体。それらは血の代用品ではなく、もうひとつの本物です。

そして、家族の側に立つ日もあるでしょう。誰かに、家族なんだから、と言いたくなったとき、一呼吸おいて、問うてみたいのです。私はいまこの言葉で、この人を支えようとしているのか、それとも、縛ろうとしているのか、と。

四、結びの黙想

あなたを縛っている血と、あなたを支えている血。

多くの場合、それは、同じ血です。

今夜は、血の家族をひとり、血によらない家族をひとり、思い浮かべてみます。

どちらにも、同じ重さの感謝があつてよいのです。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ イエスは「わたしの母、わたしの兄弟とは誰か」と問い、神の御心を行う人をこそ家族と呼んだ(マルコ3:31-35)。
- ・ 初代教会は血のつながらない者同士を「兄弟・姉妹」と呼び合い、洗礼を「第二の誕生」、代父母を「血によらない親」とした。
- ・ しかしイエス自身、十字架上で母マリアを弟子に託しており、教会は血縁の否定ではなく再定義を行った。
- ・ 沖縄の教会は、祖先への敬意を頭ごなしに偶像礼拝と断じず、信仰との識別を大切にしてきた。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 2214-2233 家族の掟——父母を敬うことの意味と限界。

CCC 1267 洗礼はすべての人を神の家族の一員とする。

CCC 1253 代父母の役割——信仰の共同体における「血によらない親」。

マルコ3:31-35 「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母である」。

用語解説

代父母 洗礼式で信仰の成長を支える役割を担う人。血縁によらない霊的な親。

トートーメー 沖縄における位牌。その継承は今日も家族の切実な問題であり続けている。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 今夜、血の家族を一人、血によらない家族を一人、思い浮かべてみましょう。
- ・ どちらにも同じ重さの感謝があってよいのです。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 位牌継承や祖先への務めをめぐる信徒の悩みに対し、「識別を要するが敵同士ではない」という原則をどう具体的に適用しますか。
- ・ 「家族なんだから、という言葉が支えるときと、逃げ場を塞ぐ壁になるとき」の違いを、家庭訪問や結婚相談でどう見分けますか。

第14課 ウンケー

テーマ:「帰ってくるとは何か」

一、沖縄の風景から

旧暦七月十三日、旧盆の初日。夕暮れの沖縄の集落は、どこか、そわそわしています。ウンケー。ご先祖をお迎えする晩です。

仏壇は、朝から整えられています。サトウキビの長い茎が二本、杖として供えられます。ご先祖が歩いて帰ってくるための、杖です。果物が盛られ、夕方にはウンケージュシーと呼ばれる炊き込みご飯が湯気を立てます。日が落ちる頃、門の前や道の辻で線香が焚かれ、家々の明かりが灯ります。

おかえりなさい。誰に言うともなく、そう言って、家族は死者を家に招き入れます。それから三日間、死者は家にいて、家族と一緒に食事をし、最終日のウークイの夜、送られて帰っていきます。ウチカビが焚かれ、たくさんのご馳走を持たされて。

帰ってきて、また、帰っていく。この島の死者は、年に一度、二つの家の間を旅するのです。

死者が帰ってくる、という言い方を、私たちは半分信じ、半分は比喻として使っています。本当に帰ってくるのか、と問い詰めるのは野暮でしょう。けれども、ウンケーの夕暮れの、あの独特の気配は、単なる比喻と呼ぶには濃すぎます。

そこで、問いの向きを変えてみたいのです。帰ってくるとは、そもそも、何なのでしょう。元の場所に、元のままの姿で現れることでしょうか。だとしたら、死者の帰還も、そして教会の語る復活も、昔の再現ということになります。けれども、本当にそうでしょうか。

二、教会は何を教えるか

教会は、キリストの復活を信じています。ここで大切なのは、復活は蘇生ではない、ということです。福音書には、イエスがラザロという人を生き返らせた話があります。ラザロは墓から出てきて、元の生活に戻りました。そして、いつの日か、もう一度死んだはずです。蘇生とは、元の生に戻ることであり、死を先送りにすることです。復活は、違います。復活したキリストは、もう死なない、と教会は信じてきました。元の生への復帰ではなく、死の向こう側の、新しいいのちなのです。

興味深いのは、復活のイエスに出会った人々の反応です。彼らは、すぐには分からなかった、と福音書は正直に記しています。マグダラのマリアは、復活のイエスを園丁だと思い込みました。エマオへ向かうふたりの弟子は、道すがらずっと一緒に歩き、話し込みながら、気づきませんでした。分かったのは、パンを裂いたとき。同じ方なのに、同じではない。連続していて、しかも新しい。復活の体験談は、一様にその不思議な二重性を証言しています。

そしてマリアが、思わずすがりつこうとしたとき、イエスは言うのです。わたしにすがりつくのはよしなさい、と。冷たい言葉に聞こえるかもしれませんが。けれどもこれは、以前の関係の続きに戻るのではない、という宣言なのだと思います。復活は再会です。しかし、単なる再会ではありません。昔に戻る再会ではなく、新しい関係へ招かれる再会なのです。

ウンケーの死者も、三日で帰っていきます。福音書の復活のイエスも、やがて弟子たちの目の前から上げられていきました。どちらの伝統も、死者を手元に留め置くことを、しないのです。会って、食べて、そして送る。とどめないことが、冷たさではなく、新しい関係の作法である、と知っているかのように。

では、復活のいのちとは具体的にどういうものか。教会は、実は、多くを語りません。パウロは、霊の体、という逆説的な言葉で語るのが精一杯でした。死後の世界の見取り図を描くことを、教会は自分の仕事だと考えてこなかったのです。教会が手にしているのは地図ではなく、約束です。先に行った方が、道であってくださる、という約束だけなのです。

三、日々の生活へ

帰る、ということなら、私たちにも身近な経験があります。帰省です。

実家の玄関をくぐると、人は、部長でも母親でもなく、息子や娘に戻ります。それは安らぎでもあり、ときに、息苦しさでもあります。親はいつまでも子ども扱いをし、こちら、昔の役割を無意識に演じてしまう。帰郷がづらいのは、たいてい、全員が、昔のままの関係に戻ろうとするからです。

けれども、誰も昔のままではありません。親は老い、子は変わりました。帰るとは、昔の自分の席に座り直すことではなく、変わった者同士が、新しく出会い直すことなのかもしれません。すがりつくのはよしなさい、というあの言葉は、帰省の玄関先でも、静かに響いている気がします。

亡くなった人についても、同じことが言えるでしょう。帰ってきてほしい、と願うとき、私たちは何を願っているのでしょうか。あの日々の続きでしょうか。それは、正直な願いです。けれども信仰が指し示すのは、続きではなく、新しさです。いつか会う日、私たちは、昔のままの再会ではなく、互いに新しくされた者としての再会を、贈られるのかもしれません。

四、結びの黙想

帰ってきてほしい人の顔を、思い浮かべてみます。

元通りでなくても、会いたいでしょうか。

変わってしまっている、変わってしまった自分でも、会いたいでしょうか。

会いたい、と思えたなら、その願いはもう、復活の信仰のすぐ隣にあります。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 復活は蘇生(ラザロの物語)とは異なり、元の生への復帰ではなく、死の向こう側の新しいいのちである。
- ・ 復活のイエスに出会った人々は「すぐには分からなかった」——同じ方なのに、同じではない、という二重性が証言されている。
- ・ 「わたしにすがりつくのはよしなさい」(ヨハネ20:17)は、昔の関係の続きではなく、新しい関係への招きの宣言である。
- ・ ウンケー(先祖迎え)とウークイ(送り)に見られる「帰ってきて、また帰っていく」という構造は、とどめないことの作法を示唆する。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 646 復活は自然的出来事ではなく、蘇生(ラザロ)とは異なる新しいいのちへの移行である。

CCC 640-644 復活顕現の記述——弟子たちがすぐには気づかなかったという証言。

CCC 999 「霊の体」——復活の体の性質についての教会の慎重な語り方。

用語解説

蘇生 元の生に戻ることに過ぎない。死を先送りするに過ぎない。

復活 死の向こう側にある新しいいのち。もう死なない、質的に新しい存在様式。

霊の体 パウロが復活の体を表現するために用いた逆説的表現(1コリント15章)。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 帰ってきてほしい人の顔を思い浮かべてみましょう。元通りでなくても、会いたいですか。
- ・ 変わってしまっている、変わってしまった自分でも、会いたいと思えますか。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「復活は再会だが、単なる再会ではなく、新しい関係へ招かれる再会」という区別を、死者の月の説教やお盆行事への司牧的配慮にどう活かしますか。
- ・ 「教会が手にしているのは地図ではなく約束」という表現を、死後の世界について尋ねる求道者への応答にどう用いますか。

第15課 ガンガラーの谷

テーマ:「人間はどこから来たのか」

一、沖縄の風景から

南城市、ガンガラーの谷。数十万年をかけて鍾乳洞が崩れ落ち、天井を失った洞窟が、深い緑の谷になりました。入口は、洞窟の口をそのまま使ったカフェです。ひんやりとした薄闇でコーヒーを受け取り、ガイドと一緒に、谷へ降りていきます。

シダの葉が光を透かし、湧き水が流れ、鍾乳石が今もゆっくり伸びています。谷の主のような巨大なガジュマルが、気根を何十本も垂らして立っています。ランタンを提げて洞窟をくぐると、闇の奥から、水の滴る音だけが聞こえます。

この谷の一带は、発掘調査の現場でもあります。近くの採石場からは、およそ二万年前の人骨、港川人が見つかりました。谷の中の洞窟からも、古代の人々の暮らしの跡や埋葬の痕跡が掘り出され、調査は今も続いています。二万年前、この闇のどこかで、誰かが火を焚き、誰かが死者を葬ったのです。

ガイドの説明に、みんなが静かにうなずきます。私たちの祖先。その言葉が、洞窟の闇の中では、教科書で読むよりずっと、近くに感じられます。

人間はどこから来たのか。この問いに、科学は驚くべき答えを重ねてきました。アフリカに現れた人類が、何万年もかけて旅をして、この島に辿り着いたこと。骨の形から、当時の暮らしまで。

けれども、谷の闇の中で、もうひとつの問いが、消えずに残っていることに気づきます。どうやって来たか、ではなく、なぜいるのか、という問いです。二万年前の誰かも、火のそばで、同じことを考えなかったでしょうか。私たちは、なぜ、いるのだろう、と。

二、教会は何を教えるか

最初に、誤解をひとつ、片づけておきます。カトリック教会は、進化論と戦っていません。二十世紀半ばの回勅は、人間の体の由来を進化の枠組みで研究することを、信仰と矛盾しないと認めました。ヨハネ・パウロ二世は、進化はもはや単なる仮説以上のものだ、とまで述べています。創造か進化か、という二者択一の構図そのものが、教会の公式の立場から見れば、的外れなのです。

では、創世記は何を語っているのでしょうか。よく読むと、創世記の冒頭には、創造の物語がふたつ、並んで置かれています。七日間の荘厳な物語と、土くれから人が造られる素朴な物語。順序も雰囲気も食い違うふたつの物語を、聖書の編集者は、矛盾を承知で、両方残しました。それ自体が答えのようなものです。これは観察の報告書ではない。世界と人間についての、信仰の告白なのだ、と。

創造という教えの核心は、大昔の点火の瞬間の説明ではありません。神学の伝統は、創造を、続いているものとして考えてきました。存在するものは、今この瞬間も、存在の根拠に支えられて在る、と。トマス・アキナスにとって、神は原因の行列の先頭に並ぶ一番目の原因ではなく、行列全体を成り立たせている根拠でした。ですから、宇宙の始まりの仕組みが科学によってどれほど解明されても、この問いは残るのです。なぜ、何も無いのではなく、何かがあるのか。この問いは、科学の失敗ではなく、科学とは別の階の問いなのです。

そして谷の発掘現場は、もうひとつのことを教えてくれます。古代の人々は、死者を葬っていました。埋葬は、人間を人間たらしめる行為のひとつだと言われます。道具を作る生き物は他にもいます。けれど

も、死んだ仲間を丁寧に横たえ、去りがたく思う生き物は、まれです。埋葬とは、この存在は消えてよいものではない、という抗議です。つまり、存在の理由への問いは、二万年前から、すでに始まっていたのです。

創造の教えを一行に縮めるなら、こうなるでしょう。あなたは、偶然の産物として黙認されているのではなく、意図されて、望まれて、在る。証明はできません。けれども、埋葬する手は、二万年前から、それを信じたがっていたように思えるのです。

三、日々の生活へ

なんで私は生まれてきたの。子どもが、ある日ふいに、そう聞くことがあります。親は答えに詰まります。詰まっていいのだと思います。それは、宿題の質問ではなく、祈りに近い問いだからです。

大人になると、この問いは形を変えます。私は、何の役に立っているのだろう。この会社に、この家に、私は必要なのだろうか。現代は、存在理由を生産性で測る癖のある時代です。役に立つから、いてよい。裏返せば、役に立たなくなったら。その論理の冷たさを、疲れた夜の私たちは、自分自身に向けてしまいます。自分なんて、いなくてもいいのではないかと。

創造の信仰は、その夜に、静かに反対します。あなたの存在理由は、あなたの業績の中にはありません。それは、あなたが生まれるより前に、あなたの外側で、すでに決まっていました。望まれて、在る。役に立つかどうかは、そのあとの、二番目以下の話です。

もし今夜、その言葉がうまく信じられなくても、かまいません。二万年前の谷の誰かから、今夜のあなたまで、問いは受け継がれてきました。問いを抱えて生きること自体が、もう、人間という不思議の一部なのです。

四、結びの黙想

今夜、寝る前に、一度だけ問うてみます。

私は、なぜ、いるのだろう。

答えが出なくても、閉じないでおきます。

その問いの奥で、望まれて在る、という声がしないか、耳を澄ませてみます。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ カトリック教会は進化論と戦っておらず、ヨハネ・パウロ二世は「進化はもはや単なる仮説以上のもの」と述べている。
- ・ 創世記冒頭には二つの創造物語が並置されており、これは観察報告ではなく信仰の告白として読まれるべきである。
- ・ 創造とは大昔の点火の瞬間の説明ではなく、「今この瞬間も存在の根拠に支えられて在る」という継続的な神学的真理である。
- ・ 二万年前の埋葬の痕跡は「この存在は消えてよいものではない」という抗議であり、存在への問いの古さを示している。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 282-289 創造についての教理と、科学的探求との関係。

CCC 355-361 人間は神にかたどって造られている。

CCC 366 人間の靈魂は神によって直接創造される。

用語解説

創造か進化か 教会の公式見解では、対立する二者択一ではない。創造は「なぜ何かがあるのか」という問いに、進化は「どのように今の形になったか」という問いに答える。

埋葬 死者を丁重に葬る行為。人間を人間たらしめる最古の営みの一つとされる。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 「私は、なぜ、いるのだろう」と、今夜一度だけ問うてみましょう。
- ・ 答えが出なくても、その問いを閉じずに抱えておきましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 創造と進化の非対立を、科学的教育を受けた求道者・青年信徒にどう分かりやすく説明しますか。
- ・ 「存在理由を生産性で測る」現代の癖に対し、「望まれて在る」という創造信仰をどう具体的な司牧言語に落とし込みますか。

第16課 浜比嘉島

テーマ:「神話は嘘なのか」

一、沖縄の風景から

うるま市、海中道路。浅い海の上をまっすぐ延びる道を渡り、さらに橋をひとつ越えると、浜比嘉島に着きます。赤瓦の屋根、石垣の路地、昼寝をする猫。時間の流れが、橋ひとつ分、ゆっくりになったように感じられる島です。

この島は、琉球開闢の神話の島です。アマミキヨとシネリキヨ。琉球の島々を造ったと伝えられる二神が、この島に降り立ち、住んだとされています。比嘉の集落の奥、洞窟の拝所シルミチューには、子宝を願う人々が今も参ります。浜の集落の沖には、小さな岩の島があり、アマミチューの墓と呼ばれる拝所があります。旧正月には、集落の人々がここで一年の平安を祈ります。

観光客が、案内板の前で足を止めます。神様のお墓、と読み上げて、少し笑い、それでも写真を撮り、なんとなく手を合わせて帰っていきます。橋の向こうには、現代の暮らしがあり、この島には、神話が住んでいます。

考古学は、この島に神が住んだことを裏付けません。当然です。地質学は、島々が神の手ではなく、サンゴと隆起によってできたことを教えます。では、アマミキヨの物語は、嘘なのでしょうか。

嘘、と切って捨てるには、この物語は生きすぎています。何百年ものあいだ、人々の祈りを支え、集落の一年に節目を与え、今も現に人を集めているのです。事実でないことは、真実でないことなのでしょうか。事実と真実は、同じものなのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

聖書を開いたことのある人は、意外に思うかもしれませんが、聖書は一冊の本というより、図書館です。法律の文書があり、詩があり、恋の歌があり、手紙があり、幻の書があります。そして、その冒頭には、神話の文体で書かれた物語群が置かれています。創世記の最初の十一章。天地創造、アダムとエバ、カインとアベル、ノアの洪水、バベルの塔。

教会は長い時間をかけて、これらの物語を、事実の報告として読むことの限界を学んできました。アダムとエバの物語は、いつどこで起きたかを特定できる事件の記録ではありません。けれども、では意味がないのかといえば、まるで逆です。人間は土くれに神の息が吹き込まれたものだ、という一節は、人間の卑小さと尊厳を、これ以上ないほど簡潔に語ります。禁じられた木の実の物語は、なぜ人は、してはいけないと知っていることをするのか、という謎を描きます。カインとアベルは、最初の殺人が兄弟の間で起きたと語ります。人類最初の他人ではなく、最初の兄弟が、です。これらは、いつ、の問いには答えません。その代わり、いつも、を語るのです。いつの時代の人間にも起きていることを。

神話は嘘だ、と言う人は、真実の文体がひとつしかないと思い込んでいるのかもしれませんが。実験レポートの文体だけが真実を運ぶのなら、詩も、音楽も、あなたを愛しているという言葉さえ、検証不能な嘘になってしまいます。真実には、複数の文体があるのです。

イエス自身が、そのことをよく知っていた方でした。イエスの教えの中心には、たとえ話があります。善いサマリア人は、実在の人物ではないでしょう。放蕩息子も、警察の記録には残っていません。つまりイエ

スは、作り話を語ったのです。そして、その作り話ほど深く人間の真実を突いた言葉を、人類はあまり持っていません。

ただし、ひとつだけ、教会が譲らずにきた区別があります。教会は、福音の中心を、神話の文体では語りませんでした。信条は、ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、と、ローマの一役人の固有名詞を出して語ります。神々の永遠の物語ではなく、特定の時代の、特定の場所の出来事として。神話が語る、いつも、の真実が、一度きりの、あのとき、に肉となった。教会が信じてきたのは、そういう出来事です。神話を軽んじないこと。そして、神話と歴史の縫い目に立つこと。教会の場所は、ここでも、境界の上なのです。

三、日々の生活へ

どの家にも、神話があります。

おじいちゃんは戦後、鍋ひとつで商売を始めた。うちの家系は昔から我慢強い。あの引っ越しが、わが家の運命を変えた。細部を検証すれば、たぶん、あちこち事実と違うでしょう。話は年々、少しずつ立派になっているかもしれません。けれども、その物語を囲んで、家族は自分たちが何者かを確かめてきたのです。

子どもに、それ本当なの、と聞かれる日が来ます。そのとき、選べる答えはふたつではなく、みつつあります。本当だよ、と言い張ること。作り話だよ、と切り捨てること。そして、こう言うことです。細かいところは分からないけれど、この話が伝えようとしていることは、本当だと思うよ、と。

会社にも、教会にも、国にも、物語があります。物語は共同体を養いますが、検証を拒み始めた物語は、人を縛る道具に変わります。物語を愛することと、物語を疑えることは、両立します。むしろ、その両立ができる共同体だけが、物語と健康に付き合えるのだと思います。

四、結びの黙想

あなたの家に伝わる物語を、ひとつ思い浮かべてみます。

事実かどうかを調べる前に、問うてみます。

この物語は、何を守ろうとしてきたのだろう、と。

それが分かったら、事実の細部は、少しだけ、どうでもよくなるかもしれません。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 聖書は一冊の本というより図書館であり、創世記冒頭の11章は神話の文体で書かれている。
- ・ 教会はこれらの物語を事実の報告としてではなく、いつの時代にも起きていた真実(「いつも」)を語るものとして読んできた。
- ・ イエス自身がたとえ話(作り話)を通して深い人間の真実を語った。
- ・ しかし教会は福音の中心(ポンティオ・ピラトのもとでの受難)を、特定の時代・場所の史実として語ることを譲らなかった。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 337-354 聖書における創造の記述とその文学類型についての教え。

CCC 110 聖書解釈においては著者の意図した文学類型を考慮する必要がある。

CCC 597 信条における「ポンティオ・ピラトのもとで」という歴史的具體性。

用語解説

文学類型 聖書のテキストがどのような文体・様式で書かれているかを見極める解釈学の概念。史実の報告と信仰の告白は異なる類型を持ちうる。

神話 本文では、事実の報告ではなく「いつも」起きている真実を語る文体として肯定的に扱われている。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ あなたの家に伝わる物語を一つ思い浮かべてください。それは何を守ろうとしてきたのでしょうか。
- ・ 事実の細部を調べる前に、その物語が伝えようとしている「本当のこと」を考えてみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 創世記1-11章の文学類型についての教会の理解を、科学的世界観を持つ求道者にどう分かりやすく提示しますか。
- ・ 「物語を愛することと、物語を疑えることは両立する」という視点を、教会や地域の伝承の継承教育にどう活かしますか。

第17課 シーサー

テーマ:「人はなぜ境界を守るのか」

一、沖縄の風景から

沖縄の集落を歩くと、あちこちから視線を感じます。屋根の上から、門柱の上から、シーサーがこちらを見ているのです。口を開けた一体と、口を結んだ一体。赤瓦の職人が余った漆喰で作ったという素朴なものから、土産物屋に並ぶ愛嬌のあるものまで、姿はさまざまです。

路地を歩けば、石敢當。丁字路の突き当たりの壁に埋め込まれた、小さな石の札です。まっすぐにしか進めない魔物、マジムンが、突き当たりから家に入り込まないように。古い家の門の内側には、ヒンブンと呼ばれる目隠しの壁が立ち、外からの視線と、悪いものの侵入を、やんわりと遮ります。

村の外れには、村落獅子と呼ばれる古い石獅子が座っていることがあります。八重瀬町富盛の大獅子は、三百年以上、火の山に向かって集落を守ってきました。その体には、沖縄戦の銃弾の痕が、無数に残っています。守り神が、撃たれたのです。それでも獅子は撤去されず、今も同じ場所に座り、同じ方角を睨んでいます。

迷信だ、と笑うことは簡単です。漆喰の獅子に、魔物を止める力などない、と。

けれども、笑った私たちのポケットには、お守りが入っていないでしょうか。車には交通安全のステッカー、玄関には盛り塩、スマートフォンには何重ものパスワード。姿を変えながら、私たちは今も、内と外の境目に、何かを置き続けています。

人は、なぜ境界を守るのでしょうか。そして、境界に置かれるものは、恐れのはるしなののでしょうか。それとも、何か別のものでありうるのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

境界に祈りを置く、という営みは、人類に広く、深く根づいています。そして聖書の民も、その例外ではありませんでした。

ユダヤ教の家の戸口には、メズーザーと呼ばれる小さな筒が取り付けられます。中には、聖書の言葉を記した羊皮紙。家に入出入りするたび、人はそれに触れて、神の言葉の内に住むことを思い起こします。出エジプトの夜、滅びが民の家々を過ぎ越したのは、鴨居と柱に小羊の血が塗られていたからでした。戸口は、聖書において、いのちと死の分かれ目となった場所なのです。

カトリックの聖堂の入口には、聖水盤があります。人々は指を浸し、十字を切って中に入ります。俗なる日常から聖なる集いへの、敷居の作法です。教会にはまた、家の祝別という習慣があり、新しい住まいに司祭を招いて祝福を祈ります。こうした物や仕草を、教会は準秘跡と呼んできました。それ自体が魔法の力を持つのではなく、祈りを日常の手触りにするための、ささやかな器です。詩編は歌います。主があなたの出入りを守ってくださる、今も、とこしえに、と。

つまり、境界に何かを置く心そのものは、迷信ではないのです。境界は、危険の場所であり、同時に移行の場所です。家の内と外、共同体の内と外、昼と夜、旅立ちと帰還。人生の変わり目にも、私たちは儀礼を置いてきました。人間は、境界を、裸のままでは越えられない生き物なのだと思います。

ただし、分かれ道がひとつあります。境界の守りは、恐れ of 呪術にもなれば、信頼の祈りにもなる、ということです。お守りを増やし、施錠を増やし、それでも不安が減らないとき、守りは呪術に傾いています。呪術は、不安を管理しようとして、不安に管理されるからです。祈りは違います。祈りは保険ではなく、関係です。守ってください、という言葉の宛先がある、ということです。

富盛の大獅子を、思い出したいのです。あの獅子は、弾を止められませんでした。守り神としては、敗北したのかもしれませんが。けれども集落は、傷だらけの獅子を、捨てませんでした。銃痕ごと、今も座らせています。あれは、万能の防壁ではなく、共に立ち続けたもののしるしなのでしょう。守りとは、何も起きないことの保証ではなく、何が起きて共にいる、という約束の形なのかもしれません。

三、日々の生活へ

あなたの暮らしの境界には、何が置いてあるでしょうか。

玄関のお守り、受験の合格祈願、防犯カメラ、保険の証書、そして幾つものパスワード。現代の私たちは、史上最も厳重に境界を守る人々です。それなのに、史上最も不安な人々でもあります。守りの装置を増やしても、不安の総量は、不思議と減らないのです。

安全と安心は、別のものだからでしょう。安全は装置が作りますが、安心は関係が作ります。子どもが夜道を怖がらないのは、防犯ブザーを持っているからではなく、手をつなぐ人がいるからです。

だとすれば、私たちの境界に本当に必要なのは、もうひとつの錠前ではなく、出入りを見守ってくれる誰かへの信頼なのかもしれません。玄関を出るときの、いってらっしゃい。帰ったときの、おかえり。あの声は、実は、屋根の上のシーサーと同じ仕事をしています。境界に置かれた、小さな祈りなのです。

四、結びの黙想

明日の朝、家を出るとき、敷居の上で一秒だけ立ち止まってみます。

今日の出入りを、守ってください。

それだけ祈って、出かけてみます。

帰ってきたら、境界の内側に灯りがあることに、気づくかもしれません。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 境界に祈りやしるしを置く営みは、人類に広く根づいており、聖書の民も例外ではない(メズーザー、過越の血)。
- ・ 教会にも聖水盤や家の祝別といった「準秘跡」があり、それ自体が魔法の力を持つのではなく、祈りを日常の手触りにするための器である。
- ・ 境界の守りは「恐れ of 呪術」にも「信頼 of 祈り」にもなりうる——違いは不安の管理か、関係への信頼かにある。
- ・ 銃痕の残る富盛の大獅子が撤去されずに座り続けていることは、守りが「何も起きない保証」ではなく「共にいる約束」であることを示す。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 1667-1673 準秘跡——秘跡そのものではないが、祈りをもって恵みへと人を備える教会の制定した聖なるしるし。

CCC 1670 準秘跡は、恵みを受ける心構えを整える。

出エジプト12章 過越の夜、鴨居と柱に塗られた小羊の血。

用語解説

準秘跡 洗礼や聖体などの七つの秘跡とは区別される、教会が制定した祈りやしるし(聖水、家の祝別など)。

メズーザー ユダヤ教の家の戸口に取り付けられる、聖書の言葉を記した羊皮紙入りの小筒。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 明日の朝、家を出るとき、敷居の上で一秒だけ立ち止まってみましょう。
- ・ 「今日の出入りを、守ってください」とだけ祈って出かけてみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「安全は装置が作るが、安心は関係が作る」という区別を、防犯対策に頼りがちな現代の不安への司牧的応答にどう活かせますか。
- ・ 準秘跡についての理解を、御守りやパワースポット文化に親しむ求道者への識別指導にどう役立てられますか。

第18課 第一牧志公設市場

テーマ:「値段は価値を表すのか」

一、沖縄の風景から

那覇、国際通りから市場本通のアーケードへ。人の流れに乗って進むと、建て替えられて明るくなった第一牧志公設市場に着きます。

一階は、色の洪水です。鮮魚のケースには、青いイラブチャー、赤いミーバイ、夜光貝。精肉の店先には、豚の三枚肉、テビチ、そして顔の皮、チラガーが堂々と並びます。島らっきょう、海ぶどう、山盛りのかまぼこ。あちこちに値札が立ち、店のおばさんの声が飛び交います。観光客が値段を聞き、少しまけてもらって、笑っています。

二階は食堂です。一階で買った魚を持ち上げると、調理して食卓に出してくれます。さっきまで値札のついていた魚が、湯気を立てる皿になって戻ってきます。

市場は、正直な場所です。すべてのものに、値段がついています。今日の相場、目利き、駆け引き。ここでは、価格という言葉が、朝から晩まで飛び交っています。

一尾いくら、百グラムいくら。市場の中では、あらゆるものが数字で語られます。それは市場の健全さであって、責められることはありません。

けれども、アーケードを出たあと、ふと問いが残ります。値段は、価値を表しているのでしょうか。値段の高いものが、価値の高いものなのでしょうか。そして、値段のつかないものは、価値がないのでしょうか。市場の言葉は、市場の外まで、どこまでついてくるのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

教会は、市場の敵ではありませんでした。中世の神学者たちは、公正な価格とは何か、を大真面目に論じています。トマス・アキナスは、売買における騙しや、相手の窮状につけ込んだ値づけを、正義の問題として扱いました。価格の議論を、信仰の外の話とみなさなかったのです。市場は、人と人が出会い、それぞれの労働の実りを交換する場でありえます。牧志の市場の活気を見れば、それは分かります。教会が市場そのものを断罪する必要は、ありません。

けれども教会は、忘れられないひとつの記憶を抱えています。神の子に、値段がついたことがあるのです。銀貨三十枚。当時の律法で、奴隷ひとりの賠償額とされた金額です。人間を売り渡すとき、人はその人を、量れるものに変えます。イスカリオテのユダの物語は、裏切りの物語である前に、値づけの物語なのです。

そしてパウロは、初代の信徒たちに、不思議な言い方をしました。あなたがたは、代価を払って買い取られたのだ、と。奴隷の身請けの比喻です。ここには鋭い逆説があります。人間の値段を問うなら、その代価はキリストのいのちだった、と言うのです。つまり、値段がつけられないほど高い。人間の価値は、市場の言葉で言い尽くそうとすると、桁あふれを起こすのです。

価格と価値は、別の言語です。価格は交換の言語で、比べられるものにしか使えません。価値は存在の言語で、比べられないものについて語ります。そして、人生でいちばん大切なものは、たいいてい交換できません。いのち、時間、信頼、赦し、愛。市場は偉大な仕組みですが、自分の限界を教えてはくれません。市場の限界を告げるのは、市場の外の言葉、たとえば福音の仕事です。

もともと、市場の中にも、市場の外の論理は、こっそり忍び込んでいます。牧志のおばさんが、これはおまけね、と袋に一品足してくれるとき。味見していきなさい、と切り身を差し出すとき。それは価格の体系の、小さな裂け目です。交換ではなく、贈与。商売の真ん中で、ふいに顔を出す無償性。市場が人間の営みである限り、その裂け目は、完全にはふさがらないのです。

三、日々の生活へ

市場の言葉は、市場の外に、しばしば越境してきます。

年収で人を紹介する言い方。時給に換算される家事。あの人は使える、使えない、という職場の言葉。婚活の市場価値、という表現。私たちは気づかぬうちに、人間を、値札の言語で語り始めています。

そして、その言語は最後に、自分自身に向かいます。転職サイトに登録した夜、自分の市場価値という数字を眺めて、妙に落ち込む。あの感覚の正体は、こうです。価格の言語で測られた自分が、自分の全部だと、一瞬、思い込んでしまうのです。

思い出したいのは、あなたの一日の中の、値段のつかないものたちです。朝の挨拶。子どもの寝顔。友人からの、用事のない連絡。誰にも気づかれなかった親切。それらは無料ですが、無価値ではありません。むしろ、値段がつかないのは、価格の言語が届かない高さにあるからです。

値札を読む力と、値札のないものを見る力。市場で暮らす私たちには、両方が要ります。

四、結びの黙想

今日、あなたが受け取った、値段のつかないものを、ひとつ思い出してみます。

そして、あなたが差し出した、値段のつかないものも、ひとつ。

帳簿には載らないその取引が、今日のあなたを、案外いちばん養っていたのかもしれません。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ トマス・アキナスは公正な価格の問題を、信仰の外の話ではなく正義の問題として真剣に論じた。
- ・ 神の子に値段がついたことがある——銀貨三十枚(マタイ26:15)は、裏切りの物語である前に「値づけの物語」である。
- ・ パウロは「あなたがたは代価を払って買い取られたのだ」と語り、人間の価値は市場の言語では言い尽くせないほど高いことを示す。
- ・ 価格は交換の言語、価値は存在の言語であり、人生で最も大切なもの(いのち、時間、信頼、赦し、愛)はたいてい交換できない。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 2407-2414 経済活動と正義——公正な取引と人間の尊厳の尊重。

CCC 2426-2436 経済生活は人間全体の善に仕えるものでなければならない。

1コリント6:19-20 「あなたがたは代価を払って買い取られたのです」。

用語解説

公正な価格 中世神学者(特にトマス・アキナス)が論じた、正義にかなった取引価格の概念。

贖い 代価を払って買い戻すこと。人間がキリストの死によって「買い取られた」という信仰の比喻。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 今日、あなたが受け取った値段のつかないものを一つ思い出してみましょう。
- ・ そして、あなたが差し出した値段のつかないものも一つ、思い出してみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「市場の言葉が市場の外に越境してくる」(年収で人を語る、市場価値で自分を測る等)現象に対し、福音がどう対抗言語となりうるか、具体例で説明できますか。
- ・ 「市場の中にも贈与の裂け目がある」という視点を、教会のバザーや物々交換的な奉仕活動の靈性教育にどう活かせますか。

第19課 泡盛の模合

テーマ:「喜びはどこから罪になるのか」

一、沖縄の風景から

金曜の夜、栄町の居酒屋。奥の座敷に、十人ほどの集まりがあります。テーブルの真ん中に、泡盛のボトルと、氷と、水差し。そして、一冊の古びたノート。模合帳です。

模合。毎月決まった日に集まり、決まった額を出し合って、順番にまとまった金を受け取る、庶民の互助の仕組みです。けれども、続いている模合の本体は、金勘定ではありません。集まって、飲んで、語ることです。高校の同期で三十年、職場の仲間二十年。幹事が出欠を取り、遅れてきた者が冷やかされ、乾杯の聲が上がります。カリ。

泡盛は、育てる酒でもあります。甕に寝かせて年を重ねた古酒は、とろりと丸くなり、祝いの席で振る舞われます。何年も待って、注がれる一杯。

笑い声が、夜更けまで続きます。楽しい晩です。そして、楽しい晩を何百回も重ねてきた島は、酒の喜びも、酒の影も、両方よく知っています。

酒は、聖書の中で、祝福として歌われ、同時に、警告の対象になっています。喜びと過剰。祝祭と自堕落。その境目は、どこにあるのでしょうか。

喜びは、どこから罪になるのでしょうか。そもそも、楽しむことに、うしろめたさは必要なのでしょうか。信仰は、喜びの見張り役なのでしょうか。それとも、喜びの味方なのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

まず、記録を確認しておきます。ヨハネ福音書によれば、イエスの最初のしるしは、婚礼の宴で、水をぶどう酒に変えたことでした。しかも世話役が驚くほど上等の、そして計算すると数百リットルにもなる大量のぶどう酒に、です。詩編は、人の心を喜ばせるぶどう酒、を神の恵みとして数え上げます。イエス自身、断食の人ヨハネと並べられて、見ろ、大食漢で大酒飲みだ、と悪口を言われました。福音書のイエスは、宴会の似合う人だったのです。喜びを疑うことから信仰が始まる、という思い込みは、少なくとも福音書からは出てきません。

一方で、聖書は酩酊への警告にも事欠きません。そして教会の伝統は、この両方を受け取って、節制という徳を育てました。ここが肝心なところ。トマス・アキナスにとって、節制は、快楽の否定ではありません。快楽に秩序を与える徳です。おいしいものをおいしく味わい、しかも、それに支配されないこと。禁欲とは、喜びを消す技術ではなく、喜びを長持ちさせる技術なのです。考えてみれば、過剰は喜びを増やしません。二日酔いの朝に残っているのは、喜びではなく、後悔です。喜びを本当に壊すのは節制ではなく、過剰のほうなのです。

教会の暦も、同じ知恵でできています。四旬節という節制の季節があるからこそ、復活祭の食卓が輝きます。断食は祝祭の敵ではなく、祝祭の準備です。祝祭が毎日になった瞬間、祝祭は死にます。あの泡盛の古酒が教えてくれる通りです。待つ時間が、一杯を深くする。修道院が歴史の中でビールやワインや薬草酒の名手であり続けたのは、偶然ではないでしょう。喜びを最もよく味わえるのは、喜びに溺れない人たちなのです。

ただし、正直に付け加えるべきことがあります。喜びが喜びでなくなる場所を、この島も、どの土地も、知っています。酒が、楽しみではなく、痛みの麻酔になるとき。飲みたいのではなく、飲まずにいられないとき。それはもう、祝祭の問題ではなく、孤独と傷の問題です。そこで必要なのは説教ではなく、手当てです。教会にできるのは、裁くことではなく、その人がひとりで飲まずに済む場所に、なることでしょう。

見分けの鍵は、たぶん、これです。その喜びは、あなたを人に開くか、閉じるか。模合の泡盛は、人を開きます。ひとりの深酒は、人を閉じます。同じ酒が、です。喜びが罪に変わる境界線は、量の目盛りの上ではなく、開くか閉じるかの向きの上に、引かれているのかもしれませんが。

三、日々の生活へ

酒に限った話ではありません。

夜更けのスマートフォン。止まらない甘いもの。届いてもいないのに次を頼む買い物。どれも、入口は小さな喜びです。そして、どこかで気づくのです。これは喜びだろうか、それとも麻酔だろうか、と。

自分に問うための、簡単な質問がふたつあります。ひとつ。それは、私を人に開いているか、閉じているか。分かち合いたくなる楽しみは、たいてい健康です。隠したくなる楽しみは、たいてい危うい。ふたつ。翌朝に残るのは、感謝か、後悔か。

そして、喜び下手の人へも、ひとこと。楽しむことに、いちいち罪悪感を覚えてしまう真面目な人がいます。けれども、与えられたものを喜べないことも、実は、感謝の欠けなのです。カナの婚礼の主は、宴の途中で酒が尽きることを、良しとされませんでした。あなたの人生の祝いの席を、うしろめたさで薄めなくていいのです。

喜びを、ちゃんと喜ぶ。そのために、少し控える。祝祭と節制は、敵ではなく、ふたりでひとつの技術です。

四、結びの黙想

昨夜の、あるいは今夜の、あなたの楽しみを思い浮かべてみます。

それは、あなたを開いたでしょうか。閉じたでしょうか。

開いてくれた喜びがあったなら、それを与えた方に、短く、乾杯を。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 福音書のイエスは宴会の似合う人であり、婚礼で水をぶどう酒に変えた最初のしるしを行った(ヨハネ2章)。
- ・ トマス・アキナスにとって節制は快樂の否定ではなく、快樂に秩序を与える徳である。
- ・ 四旬節という節制の季節があるからこそ復活祭の食卓が輝く——断食は祝祭の敵ではなく準備である。
- ・ 喜びが罪に変わる境界線は「量」ではなく、その喜びが人を「開くか閉じるか」の向きの上にある。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 1809 節制の徳——快樂を求める心を理性の導きに従わせる。

CCC 2290 節度——飲食における適度さの徳。

CCC 2015 自制と苦行——喜びを長持ちさせるための道。

ヨハネ2:1-11 カナの婚礼——イエスの最初のしるし。

用語解説

節制 快楽を否定するのではなく、快楽に秩序を与え長持ちさせる枢要徳の一つ。

四旬節 復活祭を準備する40日間の節制の季節。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 昨夜、あるいは今夜のあなたの楽しみを思い浮かべてみましょう。それはあなたを開きましたか、閉じましたか。
- ・ 開いてくれた喜びがあったなら、それを与えた方に短く感謝を捧げてみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「その喜びは人に開くか閉じるか」という識別の鍵を、依存や嗜癖に悩む信徒への霊的同伴にどう活かせますか。飲酒問題については専門的な支援機関への橋渡しも視野に入れましょう。
- ・ 「喜び下手」な生真面目な信徒への配慮として、感謝としての喜びをどう教育プログラムに組み込めますか。

第20課 旧盆のエイサー

テーマ:「身体は祈ることができるのか」

一、沖縄の風景から

旧盆の夜。遠くから、太鼓の音が近づいてきます。腹に響く大太鼓、乾いた締太鼓の連打、パーランクーの軽い音。道ジュネーです。青年会のエイサーが、集落の道を練り歩いていきます。

三線と地謡の歌に乗って、若者たちが型を踏みます。跳び、沈み、太鼓を打ち上げる。額の汗が、街灯に光ります。列の周りでは、白塗りのチョンダラーが道化て場を沸かせ、指笛が夜空に抜けていきます。沿道には浴衣の家族連れ。縁側から身を乗り出すおばあ。

エイサーは、祖先を送る旧盆の踊りです。その源流は、本土から伝わった念仏踊りにあると言われます。つまり、これは元をたどれば、祈りだったのです。祈りが、太鼓を持ち、隊列を組み、道を練り歩く姿になった。

太鼓の音が、家々の窓ガラスを震わせて、遠ざかっていきます。死者たちは今夜、この音に送られて、帰っていくのです。

祈りとは、心の中で言葉を唱えることだ。私たちは、いつの間にか、そう思い込んでいないでしょうか。目を閉じ、手を合わせ、内面で神に語りかけるのが祈りであって、体の動きは、せいぜいその飾りである、と。

けれども、エイサーの夜は問いかけてきます。跳ぶこと、打つこと、練り歩くこと。身体そのものは、祈ることができるのでしょうか。それとも、祈りはあくまで心の仕事で、体はただの入れ物なののでしょうか。

二、教会は何を教えるか

カトリックのミサに、初めて与った人が驚くことのひとつは、身体の忙しさです。立つ。座る。ひざまずく。頭を下げる。胸を打つ。十字を切る。行列する。歌う。香が焚かれ、水が注がれ、そして最後には、食べるのです。ミサは、思想の講義ではありません。動作の連なりです。典礼とは、身体の言語なのです。

これは偶然ではなく、信仰の中身から来ています。キリスト教は、言葉が肉となった、という一句の上に建っている宗教です。神が身体を取った、と信じる者は、身体を、靈魂の牢獄として軽んじることができません。使徒信条は、魂の不滅を、とは言いません。からだの復活を信じます、と言うのです。身体は、救いの外に置かれた包装紙ではなく、救われるものそのものの一部です。

旧約聖書には、踊る王の姿が記されています。ダビデは、神の箱がエルサレムに運び上げられる日、力の限り踊りました。王妃ミカルはそれを見て、王ともあろう者がはしたない、と心の中で蔑みました。聖書は、はっきりと、踊るダビデの側に立っています。パウロも書いています。自分の体を、神に喜ばれる生きたいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です、と。霊的な礼拝、と訳されるその言葉が、体を献げよ、という文の中にあるのです。

身体の祈りには、心の祈りにない強さがあります。言葉が出ない日でも、体は祈れるのです。悲しみが深すぎて何も唱えられない夜、それでもひざまずく形が、祈りを担ってくれます。ロザリオの珠を繰る指、朝晩の十字のしるし。何十年も繰り返された動作には、信仰が染み込んでいて、心が留守の日にも、体が覚えているのです。信じてから祈るのではなく、祈りながら信じ方を学ぶ。教会には古い格言があります。祈りの法は、信仰の法。どう祈るかが、何を信じるかを形づくっていく、という知恵です。

エイサーの若者たちに、信仰の自覚を尋ねたら、答えは曖昧かもしれません。それでも、彼らの身体は、幾晩も稽古を重ね、汗を流して、祖先への務めを果たしています。心が先か、形が先か。あの太鼓は、形から入る道もまた道である、と打ち鳴らしているように聞こえます。形骸化、という言葉で片づける前に、思い出したいのです。形は、心の抜け殻ではなく、心を待つ器でもある、ということ。

三、日々の生活へ

心がこもらないまま唱えた、今朝の祈り。義理で行った墓参り。気の進まない当番の奉仕。あれらは、無意味だったのでしょうか。

そうは思いません。こもるべき心が今日は不在でも、器を出し続けることには、意味があります。器を捨ててしまえば、心が戻ってきたとき、注ぐ場所がないからです。夫婦の、おはよう、や、いつてらっしゃい、も同じでしょう。気持ちが乗らない日にも交わされ続けた挨拶が、関係の器を守っています。

落ち込んだ日ほど、体から始めるのは、良い知恵です。散歩をする。部屋を片づける。丁寧に料理を作る。心を直接持ち上げることはできなくても、体は動かします。そして体が動くと、心が少し遅れてついてくることがあるのです。

介護の手も、子をあやして揺れる腕も、病室で握られた手も、言葉になっていないだけで、祈りの身体だと思います。あなたの体は、あなたが思っているより、ずっとたくさん祈っています。

四、結びの黙想

今日、あなたの体は、何を祈ったのでしょうか。

言葉にならなかった祈りを、ひとつ、思い出してみます。

寝る前に、ゆっくり、ひとつだけ十字を切ってみます。

心が追いつかなくても、かまいません。体が先に、祈っています。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ ミサに初めて与った人が驚くのは身体の忙しさである——典礼とは身体の言語である。
- ・ 使徒信条は「魂の不滅」ではなく「からだの復活」を信じると告白する。身体は救われるものそのものの一部である。
- ・ ダビデが力の限り踊った物語(サムエル記下6章)に、聖書は肯定的な位置づけを与えている。
- ・ 「祈りの法は信仰の法」——どう祈るかが何を信じるかを形づくっていくという古い格言がある。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 1146-1149 人間の生における感覚的しるしと象徴の必要性。

CCC 990 からだの復活を信じるという使徒信条の告白。

CCC 1124 「祈りの法は信仰の法(lex orandi, lex credendi)」の原則。

用語解説

典礼 教会が公に神を礼拝する定型化された祈りと動作の体系。

祈りの法は信仰の法 ラテン語 lex orandi, lex credendi。祈りの実践が信仰内容を形づくるという原則。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 今日、あなたの体は何を祈ったでしょうか。言葉にならなかった祈りを一つ思い出してみましょう。
- ・ 寝る前に、ゆっくり一つだけ十字を切ってみましょう。心が追いつかなくてもかまいません。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「形骸化」という言葉で片づけがちな形式的な祈りや奉仕を、「心を待つ器」として再評価する視点を、要理教育でどう教えますか。
- ・ 身体的な祈りの伝統(十字架のしるし、ロザリオ等)が信仰形成に果たす役割を、言葉中心になりがちな現代の要理教育にどう組み込みますか。